

こゝで述べる様な特殊の見地からすれば、バーンズが、地上に存してゐる唯一の跡形は回教徒期にある事を書いて居るが、彼れが考へた程に、固より事情は暗黒ではない。印度西北方の佛教美術に長く親しんでゐた私は、忽ち、舊城市附近に數多の塔を認めるを得た。殊に注意を惹いたのはトープ・エールスタム *Topé-Roustam* 塔であり、その名、その圓い形、其の大きさ、又玄奘三藏が「三百尺」の高塔の事を述べて居る事や、其地形的事情、殊に古い化粧焼煉瓦の残つた破片等を見て、第一に之を發掘すべき事を思つたのである。其土臺の殘餘は直ぐに取り出し得たのであるが、その上階は圓筒形になつて居て、直徑四十三メートルを降らないのである。方五十三メートルの土臺面の二面を掘出すには長時を費したが、この土臺は單に日光で乾した煉瓦造であつた。かくて、此の遺物の正確な圖取を得、且つ、其歴史及び修理について若干の手引を求めるまでに至つたのである。之は回教徒の侵入で最後に破壊される迄に幾度か再修を経たのである。然しながら、建築上からこの探査が無爲に終らなかつたとしても、彫刻については事情を異にし、此の發掘で、漆喰の